

展示資料一覧

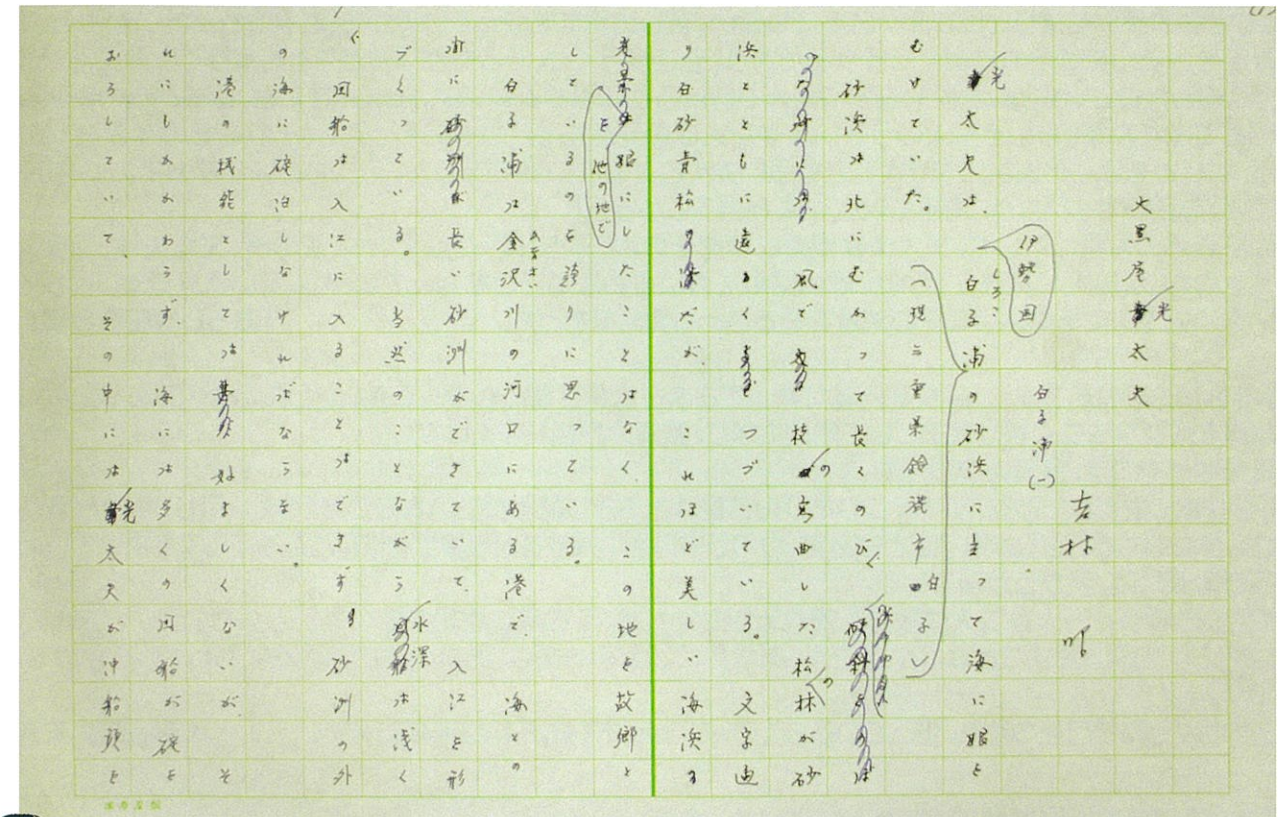
|                        |      |                     |    |
|------------------------|------|---------------------|----|
| 異国漂着集                  | 1冊   | 織田作之助『異郷』           | 1冊 |
| 異国漂着船話                 | 6冊   | 芝蘭堂新元会図             | 1幅 |
| 雲州人漂流記                 | 1冊   | 大黒屋光太夫・磯吉画幅         | 1幅 |
| 尾張者異国漂流物語              | 1冊   | 「漂流船実録」             | 1冊 |
| 海外異聞                   | 1冊   | 大黒屋光太夫らの帰郷文書        |    |
| 紀州太郎兵衛自筆漂流記 乾          | 1冊   | 「北槎聞略」              | 7冊 |
| 紀州天壽丸露国漂流記             | 1冊   | 『小国民』『少国民』          | 6冊 |
| 享和漂民記                  | 1冊   | 『日本漂流譚』             | 2冊 |
| 土州漂流人口書：完              | 1冊   | 『漂流奇談全集』            | 1冊 |
| 槃游録餘録漂流記叢              | 1冊   | 『異国漂流奇譚集』           | 1冊 |
| 漂民蠻話                   | 1冊   | 『さざなみ軍記 附ジョン万次郎漂流記』 | 1冊 |
| 漂流民上書 海防五策：完           | 1冊   | 『漂民宇三郎』             | 1冊 |
| 撫養天野屋船南部船外船二被助聞書       | 1冊   | 『露国帰還の漂民 幸太夫』       | 1冊 |
| 漂流記本目録 石井研堂著           | 1冊   | 『新村出全集 南蛮編』         | 1冊 |
| 大日本土佐国漁師漂流記            | 1冊   | その他現刊本類             |    |
| 大日本土佐国漁師漂流譚            | 1冊   |                     |    |
| 南瓢記                    | 3冊   |                     |    |
| 魯西亜国漂舶聞書               | 10冊  |                     |    |
| 時規物語                   | 2冊   |                     |    |
| 吉村昭『大黒屋光太夫』自筆原稿        | 上下2冊 |                     |    |
| 『大黒屋光太夫』表紙絵額(6点入 村上豊画) | 1点   |                     |    |
| 井上靖『おろしや国酔夢譚』序 自筆原稿    | 36枚  |                     |    |
| 井上靖愛用品 広辞苑             | 1冊   |                     |    |
| 井上靖愛用品 詳解漢和大字典         | 1冊   |                     |    |
| 井上靖愛用品 インク壺            | 1点   |                     |    |
| 井上靖愛用品 万年筆             | 2本   |                     |    |
| 井上靖愛用品 原稿用紙            | 1束   |                     |    |
| 井上靖愛用品 封筒              | 2枚   |                     |    |
| 井上靖愛用品 トレイ             | 1点   |                     |    |
| 極珍書                    | 1冊   |                     |    |
| 『大黒屋光太夫』挿絵額            | 2点   |                     |    |
| 「小説『大黒屋光太夫』の執筆」自筆原稿    | 17枚  |                     |    |
| 井上靖色紙                  | 1点   |                     |    |
| 吉村昭色紙                  | 2点   |                     |    |



編集後記

大黒屋光太夫記念館は開館5周年を迎えました。5周年記念の今回の特別展では、漂流記と文学をテーマに展示を行っています。記念館には、地元はもとより県外からも多くの方が来館していただいておりますが、特に県外から来館される方は、『おろしや国酔夢譚』『大黒屋光太夫』に感銘を受けて訪れていただく方が多く見受けられます。そこで、5周年の節目となる今回の特別展では、皆様のニーズにお応えして、両作品を中心に展示を行いました。展示では、参考にされた漂流記と直筆原稿、単行本などを並べて展示し、作品と漂流記との関係をご紹介します。また、漂流記の記述と『おろしや国酔夢譚』『大黒屋光太夫』の記述を比較できるようパネルでご紹介しております。同じテーマの別の作品を読み比べることで、その視点の違いや文章の味わいの違いを感じていただきたいと思います。

大黒屋光太夫記念館だより「大光」第12号



吉村昭『大黒屋光太夫』直筆原稿



開館5周年記念展(第6回特別展)  
海のむこうへのあこがれ  
—漂流記と漂流文学—

漂流記は、江戸時代には抑制された海外情報を知る手掛かりとして、多く流布しました。しかし、開国後は、その役割を終え、忘れ去られる運命にありました。その漂流記に、新たな命を吹き込んだ人びとがいます。明治時代に児童向けの雑誌を創刊し、児童文学の分野で漂流記を紹介した石井研堂は、最初に漂流記に着目した文化人でした。そして、漂流記を参考に文学作品を作り上げる文学者が現れました。井上靖『おろしや国酔夢譚』・吉村昭『大黒屋光太夫』・井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』『漂民宇三郎』などは、その代表的な作品です。今回の特別展では、漂流記と漂流文学をテーマに展示を行います。



## 『おろしや国酔夢譚』『大黒屋光太夫』の比較

### \*病床の船親父・三五郎（磯吉の父）が、船の人たちを集め、語る場面（アムチトカ島にて）

或時三五郎一船の人をあつめ光太夫にむかひ、我々は年久しき船人にて度々難船にも遭、種々の磨難を経し身なれば、如何様のうき目に遭うともさのみにも思ふまじ、其許には元来船人にもあらぬ人の、船長の家の養子となり、渡海の功をも積まざる身にて斯様の事に出逢も、今初めての事なれば、なれざる風土飲食に傷られんは必定なり、言置べき事ども、又国元への書状をも認めおき給へ、十六人のうち一人か二人国元へ帰らぬ事も有まじければ、その者にことづてて参らせん。我々は此まゝに成はてたりとも思ひおく事もなき身なり。其許には家産も手広き事なれば、なきあとの処置等心残りのなき様にくはしく認め申おくり給へと諫めけるが、其人は却って先立ち、光太夫は命を全ふして、今本土に帰る事を得たるは、不思議にも運強き者ならずや 『北槎聞略』より

「わしどもは多年船乗りとして度々難船にも逢い、苦しい目にも会っているから、これからさきかような憂き目を見ても、 どうにかそれに耐えて行けるだろう。そこへ行くと、そこもとはもともと船乗りではなく、船頭の家の養子となったひと、慣れぬ気候や食物に耐えて行けるとは思われぬ。言いおくべきこと、国もとへの書状など、予め認めておく方がいい。十六人のうち一人や二人は国元へ帰ることもあろうから、それをその者が持つて行くだろう。わしどもはこのままに成り果てても思いおくことのない身であるが、そこもとは仕事も手広く身上も大きいので、心残りのないように書き認めておくがよろしかろう」

この三五郎の言葉に対して、光太夫は素直に早速そのようにしようと答えたが、この時、光太夫は三五郎の瘦せ衰えた体をいたましく見守っていた。思い詰めた言い方も普通ではなかったし、病人でいる身でありながら、病んでいない光太夫にそのような死の決意を迫ることも異常であった。 『おろしや国酔夢譚』より

「私をはじめこれら主水たちは、長年船に乗ってさまざまな苦難にも遭ってきた。それに比べてあなたは、たまたま船頭を代々ひきつぐ家の養子として船頭になり、渡海の経験も多くはない」

三五郎は息をつき、言葉をつづけた。  
「裕福な家に生まれたあなたには、このたびの苦難はさぞかし耐えがたいものでありましようし、私のみるところいずれば身も心もおしひしがれることは必定。今のうちに言い残すことを書き物にしたためておくといでしよう」  
三五郎の眼には、涙がうかんでいる。

「主水たちのうち一人か二人は故郷へ帰れるかも知れず、その者に書いたものを託しなさい。私たちはこのまま死に絶えても思い残すことはない身だが、あなたには家産もあり、死後の家の処置をくわしくしたためておくべきです」

三五郎は、それで口をつぐみ、坐っているのが辛いらしくおもむろに身を横たえた。 『大黒屋光太夫』より

### \*帰国後、将軍家斉に引見する（吹上上覧所にて）場面

（吹上上覧所からの帰りに）  
それなら、一体俺はと、光太夫は考えた。そして磯吉に対してと言うより、自分自身に言った。  
「俺はな、俺は、俺はきっと自分の国の人間が見ないものをたんと見たんで、それを持って国へ帰りたかったんだ。あんまり珍しいものを見てしまったんで、それで帰らずには居られなくなったんだ。見れば見るほど国へ帰りたくなったんだ。思えば、俺たちはこの国の人が見ないものをずいぶん沢山見た。そして帰って来た」  
光太夫はここで言葉を切って、  
「だが、今になって思うことだが、俺たちの見たものは俺たちのもので、他の誰のものにもなりはしない。それどころか、自分の見て来たものを匿さねばならぬ始末だ」  
吹上の上覧所の問題は、桂川甫周には千古の一大奇事であり、昇平大和の御代の慶事であったのであるが、光太夫には凡そそうしたものから遠いものであったのである。 『おろしや国酔夢譚』より

ロシアとの折衝は将来の重要課題となり、ロシア事情に通じロシア語も身につけている光太夫と磯吉をそれにそなえさせる重要人物と判断した。そのため二人をただちに江戸に護送したが、道中、食物を毒味し付添いの医師に絶えず体調を留意させたのは、対露交渉になくはならぬ存在と考えていたからであった。

そのような幕府の姿勢の現われとして、光太夫と磯吉に対し将軍家斉が引見することが伝えられ、二人は恐懼した。九月十八日、二人は目付にとまなわられて江戸城に入り、吹上御物見所に召出された。ロシア滞在中の身なりのままにという指示で、二人は髪を三つ組みにして後ろに垂らし、それを黒い絹布でつつんだ。上質なロシアの衣服を身につけ、光太夫はエカテリナ女帝から拝受した金メダルを、磯吉は銀のメダルをそれぞれ首からかけていた。沓はペルシャ製の深靴で、二人ともロシアの笠を脇にかかえ、光太夫は籐の杖を手にはしていた。その姿は、異国の者そのままであった。 『大黒屋光太夫』より

### \*エカテリーナ2世に拝謁する場面

国王左右に命じて光太夫が願状をとり出させ御覽ありて、此疏草はだれが書たるや定めてキリ口ならんと有ければ、キリ口謹んで渠が申まゝに草したる由を答へ申す。又此書面に相違なきやとありければ、キリ口仔細も候まじと答へける。時に国王ベンヤシコと宣ふ声高く聞こへける。是は可憐といふ語なり。夫より執政トルッチンニノーフが妻にソフィヤ・イワノウナといへるを以て光太夫に海上にての艱苦、また死亡せし者の事なんどくはしく尋訪せらるゝ故、詳に答へ申ければ、ヲホ・ジャウコと宣ふ。これは死者を悼むの語なり。この時女王顔にやゝうれひを帯びて見へけるが、初よりの帰国の願はほど久敷事と聞ゆるに如何して今まで聞せざりしやと尋らるゝ趣なりしが、後にきけばセナーテといへる官人、初よりの願状を留おきて上臆に達せざりし由にて。女王以ての外に逆鱗あり。 『北槎聞略』より

光太夫にとっては一切のことが夢心地の中に行われていた。暫くすると、執政トルッチンニノーフの夫人であるソフィヤ・イワノウナが進み出て来て

「漂流中の苦難、死亡せし者のことなど、詳しく陛下に申し上げよう」と、言った。光太夫は直立した姿勢のまま、アムチトカ島へ漂流してから今日までのことを、ゆっくりとした話し方でいささかの間違いもないように注意して話した。初めのうちは言葉が勝手に自分の口から飛び出して行くように不安だったが、途中から自分でもそれと判るほど落ち着いて話すことができた。一通り語り終えたとき、

「死者は全部で何人なるや」という女帝の声が遠くで聞こえた。  
「十二人でございます」  
光太夫が答えると、  
「オホ、ジャルコ」

と、低く女帝は口に出して言った。これはこの国の人々が死者を悼む時に使う言葉で、女帝は極幸に異国に於て他界した十二人の日本の漂流民に対して哀悼の意を表したのであった。それから誰にともなく、

「この者の帰国の願いはずいぶん前々からのものと思うが、いかにして耳にいらざりしや」と、女帝は言った。誰も答える者はなかった。 『おろしや国酔夢譚』より

女帝は、興味をしめしたらしく光太夫に視線をむけていたが、近くに立つ高官を招き寄せると、さらに詳しくこれまでの経過をたずねるよう命じた。質問者に選ばれたのは、侍従長の妻である女帝の秘書官であった。

秘書官が近寄って光太夫に向かい合って立つと、美しい声で日本を出てからのことを申し上げるように、と云った。光太夫は、臆してはならぬと自らをはげまし、女帝の耳にも達するようにはっきりした口調で話しはじめた。故郷白子浦を出船してから大暴風雨に遭遇し、舵、帆柱を失って漂流、飲料水が尽きて雨水を貯め、辛うじて湯きをまめがれた。その間に主水ひとりが死亡し、辛うじてロシア領アミシャツカ島に漂着。この島に出張していた商人の手代に保護されたが、風土と食物がなじまぬため七名がつぎつぎに息絶えた。その後、カムチャッカに移されたが、そこでも三名が病死し、オホーツク、ヤクーツクをへてイルクーツクに送られた。その旅の途中、想像を絶した激しい寒気で庄蔵が左足を凍傷におかされて手術で切断され、光太夫がキリ口とともにイルクーツクからペテルブルグに出發する直前、さらに主水一人が死亡した。

「日本ヲ出マシタ時八十七人デシタ。シカシ、今デハ私ヲフクメテ生キテイルノ八五人デス」  
光太夫は、それで口をつぐんだ。広間に立ち並ぶ高官も女官たちも、光太夫に視線を向けて身じろぎもしない。女官の中には眼に涙を浮かべ、布で眼頭をおさえる者もいた。  
「オホ・ジャルコ」という女帝の声がした。 『大黒屋光太夫』より



## 大黒屋光太夫記念館 開館5周年記念事業のお知らせ バラライカミニコンサート&『おろしや国酔夢譚』『大黒屋光太夫』朗読会

- ◆日 時 平成22年11月14日(日) 13:30～
- ◆場 所 若松公民館 多目的ホール(大黒屋光太夫記念館より徒歩1分)
- ◆出演者 バラライカ：北川翔  
(第7回国際ロシア民族楽器コンクール<ペロゴリーエ杯>バラライカ部門1位)  
ギター：長尾和彦((社)日本ギター連盟正会員 日本ギター合奏連盟理事長)  
朗 読：河原徳子(「朗読文学サークル パティオ」主宰)

申込み方法 メールまたは電話でお申し込みください(平成22年10月20日より申し込み開始します)  
メール：bunka@city.suzuka.lg.jp TEL 059-382-9031